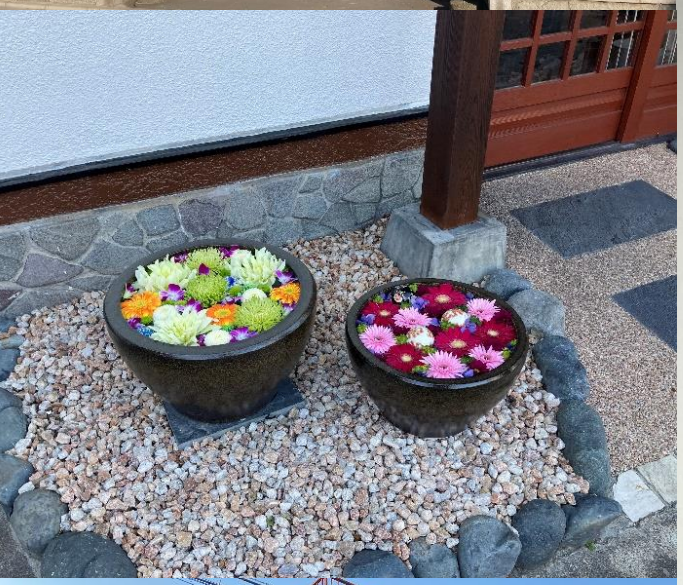


景観マガジン 埼玉スタイル

S.Style

創刊号

no.1

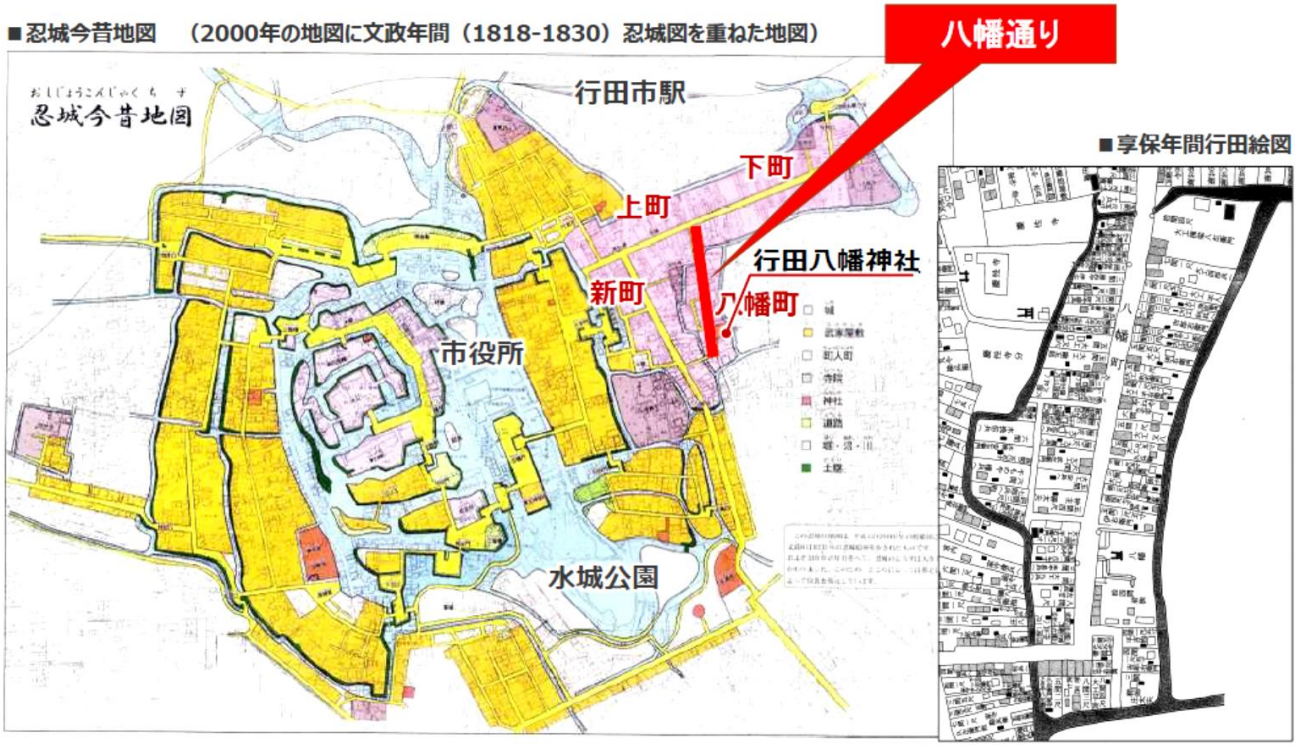
SADAHIRO TERADA

インタビュー：寺田　定弘さん

古墳時代の遺跡、戦国時代の城跡、また足袋生産全国一の歴史とともに多く建てられた蔵など、日本遺産にも認定され、近年では、映画やテレビドラマの舞台にもなり、景観や賑わいづくりの取り組みが注目されている行田市。
今回は、八幡通りの景観整備で、市民や行政関係者と一体となり、まちづくりを積極的に推進している、行田市役所の寺田定弘さんにインタビュー。
多様なステークホルダーとビジョンを共有していく、そのプロセスと熱意の根底にあるものとは…。

◆八幡通りの景観整備や賑わいづくりに関わるようになった経緯は？

◇もともと行田市の都市計画マスタープランのなかで、景観を生かしたまちづくりをやっていきましょうというのがありました。それを具現化するために、「行田らしいまち並みづくりとにぎわい創出基本計画」を 10 年間の計画で定め、行田市の中心市街地で今ある景観を生かしたまちづくりをということで、石畳風の道路をつくったり、回遊性向上のために、案内看板をつくったり、観光の拠点として案内所をつくったりしました。その中で、ハード整備としての道路整備が一定区間、予定していたところが終わり、次のまち並みづくりと賑わいづくりをどう進めていこうかとなったときに、ちょうど埼玉県の方で、景観施策を頑張っている市町村を応援していこうという補助の話があったので、それらを活用してやっていこうということで応募し、八幡通りが選定されました。



◆県の方から声掛けがあったり、注目されていた？

◇県から、「行田はこれまでも、映画『のぼうの城』や、TV ドラマ『陸王』などで、ある意味注目を浴びた時期もあるが、景観づくりに取り組んでいるけれどもなかなか結果が出ていない」という話がありました。私たちもなんとかして、景観づくりを先に進めたいということで、景観行政団体でもないし、景観条例も作っていないけれど、まち並みづくりを進めていこうというところで応募しました。

◆民間が関わることでいろいろ難しさがありますか？

◇景観整備は、個人の建物は個人が整備していくのが大前提と思っています。当然個人負担がかかるので、その部分を行田だけではなく埼玉県に応援していただけるのは、市のやろうとしていることにマッチしていると当初から考えていました。

TBS ドラマ「陸王」のロケ地
イサミコーポレーション スクール工場

◆景観事業は民間の人が関わってくる、行政が思っただけでは進まないという難しさもある中で、県の話に乗ってやろうとしたときに、市の中でも観光の話に整合させられるかどうか、協力していただけるかどうか、などいろんな考え方もあるかと思います。市役所のいろいろな分野がある中で、どのようにこのプロジェクトを理解し、推進することになったのでしょうか？

◇県のまち並み補助金の施策が出たのが４月で、応募締め切りが５月末でした（苦笑）。行田市は街並みにあわせた道路整備を数路線やってきましたが、次は修景整備もやりたいが、個人負担への補助の部分でネックがありました。県の補助金があるなら、どこがいいだろうと、都市計画課はもちろん、商工観光課、企画部門、文化財の部門など、もともと街並みづくりにソフト、ハードで関わっている部門で複数路線提案し、検討をしました。その中で、八幡通りは街路整備が終わっていて、空き地、空き店舗など賑わいづくりのきっかけになる場所が複数ある、八幡神社もそうですが、通りには『陸王』のロケ地にもなった足袋工場とか、珍しい石蔵もある。市内には歴史を感じさせる建築物が相当数存在していて、この通りで景観整備をすることで市内全体を回遊するきっかけになるのではないかと、関係各課と調整しました。
道路整備が終わっていて、基盤が整っていて展開しやすく、観光的な視点でも、可能性を秘めています。一方で、表の景観だけきれいになっても、なかなか賑わいには直結しないのではないかという考えの人もいるのではないかとも思いました。

◆街の賑わいをもたせるには、魅力をアップして、住む人自身が愛着や誇りを持つ中で、来られる方が合意をすることで、すごくいい観光が成立するという視点で景観をよくしていくことが重要であると思われます。しかし、実際にはなかなか説明が難しいところがあると思いますが、行政の中で、どう説明の工夫をされましたか？

◇調整に当たっては、賑わいを創出するきっかけ作りとしての景観形成が大切であり、ハードだけでは、賑わいは絶対生まれない、並行して市民自らが自発的な街づくりをどうやって行くかということで、その辺も地域に考えていただくことをセットでやっていこうというお話をしたことがあります。
併せて、環境経済部で、なにかソフト施策を打ってもらえないかということをお願いしました。早いうちから情報共有できたことで、みんなでやっていこうという機運が生まれたのかなと思います。

◆県の事業を使うときに、独自に工夫したところや、今回のモデル事業の特色は？

◇景観というと、建物を画一化した形にするという風に思われがちですが、今回は、地域の皆さんと話をするなかで、地域の皆さんは、同じような建物にしたいということは求めていないということがよくわかりました。いまの街の形が歴史なので、そこをいじると作り物になるということです。景観の部分で言えば、建物の形はそのままで、色等で通りの雰囲気を崩さない形がいいのではないか、というところが工夫したところです。行政の押し付けにならないように地域の人たちに聞きながらやったということが工夫といえば工夫です。あたりまえかもしれないですが。

景観整備が進む八幡通り

◆景観づくりの核となるところをどのように見つけていったのですか？

◇八幡通りは、週末は、八幡神社に人が集中しています。平日は、行田郵便局にも同じように多くの人がいる。ところが、その間を誰も歩いていない。その間に人を歩かせたい。そして、市内へそういう人たちを持っていきたい。そこで、神社の周りや郵便局の周りにはお店が数軒あるので、景観づくりについて何度もお邪魔して、ざっくばらんに話をさせて頂きました。

◆多くの方が、八幡通りの景観をよくしていこうとしているんでしょうか？全体としての感触はどうですか？

◇最初、多くの人は懐疑的でした。今でも全員が景観整備について前向きかというとそうではないと思います。結局何も変わらないのではないか、と。ずっと話していると、このままではしょうがない、という思いはほぼすべての方がお持ちだとわかりました。どうせ何も変わらない、とあきらめている感情もあったり、昔の街は好き、にぎやかな街が好きだけど、高齢だからしょうがない、なにもできない、というお話は、かなりありました。

実は地域の皆さんは、古い町並みが好きなのかなと、最初思っていました。古い町並みを取り戻そうというのではなくて、どちらかというと、町並みというより、「思い」を取り戻したいというのが、高齢者の方からはすごく感じました。「思い」を取り戻すきっかけとしての景観、みなさんが負担の少ない形で、あまりごてごてしない形にと。皆さんと話をするなかで自然にそのように落ち着いていきました。

正直、いままでは、景観づくりっていうのは、町屋みたいな、と簡単に考えていた部分もありましたが、実はそうではない。神社があるから門前町か、いや、そうではない。今までの歴史があって、今の形がある、歴史を尊重しながらどうやって雰囲気のある街並みをつくれるのか、やはり地域の人と話をしないとできないなって、意識することとなりました。

◆地域の人たちの「思い」が形になりにくいものであったときに、外観をこうしたいという具体的な要望はありましたか？

◇大きく変えたいというものはありませんでした。色とかのれんとか、そういう部分では個々でありました。

八幡通りイメージパース

◆ビジュアルを説明するときに、どんなことに気をつけましたか？

◇まず、ある程度の全体のイメージ図を、初年度に作成しました。作成にあたっては、全体の説明会を３回くらいやりました。説明会の中では、ある程度方向性の話をしながら個別に出すイメージ図については、全体のイメージ図の方向性を踏襲しながら、個別にヒアリングを行って、個々の思いをくんで、具体的なイメージ図を作って提案していきました。

個別で話してみると、ご本人たちも、思いがけないことが出てきました。元足袋屋さんは、先々代の半纏が出てきて、その背中の模様を今回の街並みにちょっと反映させたりして、お店を作られた先々代の思いを感慨深く考えさせられたという方もいらっしゃった。我々が絵を描くというよりも、ご本人たちがもしかしたら街並みを考えるきっかけとなり、一歩踏み出せたというのがあったのかなと思います。

◆通り全体の統一感というのが難しく、形や色を同じにすればいいというような安直なものではないかと思います。色などをご提案していると思いますが、どのように考えて、個々の店舗の改修に、八幡通りのテーマを据えていったのですか？

◇まず、全体の建物の色を調べました。その中で、ある一定の色が多いことが分かり、その色の範囲を作って、色の幅を許容しながら、提案しました。このことにより、皆さんの景観に対するハードルが下がった感じがしました。

個々のお店のカラーとか、こだわりもある中で、日よけのれんや、普通ののれん、庇などなどを紺色にしてみるとか、グリーンにするとか、附属物については原色もありという感じでお話しさせて頂きました。

◆今後、どのように展開をしていこうという考えですか？

◇八幡通りの景観で言えば、埼玉県の事業は令和３年度までなので、それ以降の部分は、景観条例、景観計画も含め、進めていかなくてはならないと思っています。もちろん行政の独りよがりではなく、地域の皆さんの考えや話を聞きながらやっていく必要があります。ここからが大変、と正直考えています。

◆これまでのお話で、景観行政団体に移行する際に、市民アンケートやワークショップの実施により、市民に意見を聞いて、景観形成基準ができる、というそういうシナリオではなくて、行田の場合は、まずやってみた、通りの人が、そういう事かと理解した、そこで社会実験に基づいて無理のないルールの在り方を地元の方と作っていこう、といった機運が、今回でできたと思います。寺田さんは、どういう

ルールがいいと思いますか？

◇ルールも、緩いルールだと、いろいろ意見をお持ちの方もいるだろうし、厳しいと誰もついてこないかと。補助金があるのがいいのか、ないほうがいいのか、など、いろいろあると思います。私自身もこれから勉強していく必要があると思っています。

店先や民家で飾られる花手水（はなちょうず）

◆観光はパイの奪い合いということもあるので、どういうところを賑わいとしてがんばっていきますか？また、具体的にどのようなことに取り組んでいますか？

◇やはり中心市街地が元気じゃないと、全体的にしょんぼりしちゃうと思います。中心市街地は足袋蔵を核としたまちづくりを引き続きやっていく必要があります。点在する足袋蔵と調和した街並みというのは、どういうものがいいのか、個々のお店が考える必要があるかもしれませんし、ある程度エリアで考える必要もあるかもしれない。中心市街地の取り組みは重要と思います。観光の面では、令和２年から花手水を使った取組みを行っています。最初、行田八幡神社だけでしたが、そのうち周辺の 13、14 軒に広がり、今は 70 軒以上になりました。更に今年度は毎月第一土曜日限定で花手水のライトアップイベントにも取組んでいます(令和 3 年 11 月と令和 4 年 1 月は第三土曜日)。また、毎週日曜日の午前中には「軽トラ朝市」をブラッシュアップした「行田はちまんマルシェ」も開催し、週末の賑わいに一役かっています。スタンプラリーのように、市内を回遊するきっかけになっていると思います。

毎週、市民や観光客に新鮮野菜を届けている（はちまんマルシェ）

手前味噌ですが、このような環境経済部局の切れ目のない取組みは、なかなか真似できるものではないのかなと思いますし、私自身も景観整備を頑張ろうと改めて思わせてもらっています（笑）

寺田　定弘（てらだ　さだひろ）

７２年、埼玉県行田市生まれ。行田市役所入庁後、土地区画整理事業や道路・街路事業等の業務を経て、現在、行田市都市整備部副参事として、景観を活かしたまちづくりなどの業務を担当。趣味はプロレス観戦（もっぱら深夜帯やＣＳでのテレビ鑑賞）。休日は子供の野球観戦に奔走中。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊聞き手：埼玉県景観整備機構　都市づくり NPO さいたま　深堀清隆　安部邦昭

編集：埼玉県都市整備部田園都市づくり課　細田隆

まち並み景観形成先導モデル事業　https://www.city.gyoda.lg.jp/16/03/10/matinamikeikankeiseimodel.html

行田お出かけ花ガイド　https://www.youtube.com/watch?v=Vq1FJe-a4O0

行田市観光ガイド　https://www.gyoda-kankoukyoukai.jp/

発行：　埼玉県都市整備部田園都市づくり課　2021 年 12 月
〒330-9301　さいたま市浦和区高砂 3-15-1